

③1 六甲山系における大水害の伝承 ～個人の記憶を社会の記憶に～

受賞機関 阪神大水害80年行事实行委員会

キーワード 阪神大水害、防災意識の向上、デジタルアーカイブ

全建賞審査委員会の評価ポイント

昭和13年阪神大水害の教訓を次世代へつなぎ防災意識の向上を図る取組み。「個人の記憶を社会の記憶に」を掲げて新聞社と連携、中高生と80年前の災害の体験者との座談会などの工夫により大きな効果を上げている点や、収集した情報をデジタルで尚且つオープンデータとして公開する「阪神大水害デジタルアーカイブ」を構築し、地域の防災活動における継続的な活用が期待される点が評価された。



座談会

1. はじめに

昭和13年7月、神戸市を中心に六甲山地で死者・行方不明者695人という甚大な被害をもたらした阪神大水害は、六甲山地の砂防事業の直轄化や土砂水理学の端緒となるなど、その後の日本の暮らしに大きな影響を与えたが、時間の経過とともに、その教訓は薄れようとしていた。平成30年、発生から80年の節目に、有識者、神戸新聞社、国土交通省六甲砂防事務所、兵庫県、芦屋市、西宮市、宝塚市、神戸市は阪神大水害80年行事实行委員会を組織し、「個人の記憶を社会の記憶に」をスローガンに、過去の情報の掘り起こしや、オープンデータ化にも取り組んだ。

2. 事業の概要

平成30年は阪神大水害の体験者の声を聞ける最後の機会と捉え、新聞社との連携などにより、広く情報提供を求めた。さらに、阪神大水害を知らない地元中高生と体験者が直接話す座談会を設け、より臨場感をもって災害の怖さを学んだ。

実施期間中、平成30年7月豪雨が発生し、西日本各地をはじめ、阪神間でも大きな被害を受けた。テレビ等では、過去の災害との比較が繰り返し報道され、関係者一同、過去の災害の記録や記憶のオープンデータ化の重要性を改めて感じた。

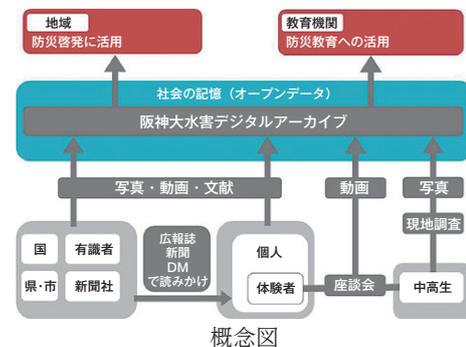
今回収集した情報は、「阪神大水害デジタルアーカイブ」としてまとめ、兵庫県立大学減災復興政策研究科との協働により、写真データに位置情報を付与することで、「神戸市情報マップ」と連携したオープンデータとすることにつながった。体験者へのインタビューは、動画で公開しており、いつでも誰でも見る事が可能である。

一連の取組みの集大成として、平成30年11月24日(土)「阪神大水害デジタルアーカイブ」の公開イベントを開催した。

3. 事業の成果

今回の取組みでは、関係機関が保存していた情報約3,680件と個人から新たに提供された情報約180件を整理し、約500件の情報がデジタルアーカイブに社会の記憶として公開されている。

また、中高生の取組みや体験者への貴重なインタビューが動画で配信されていることから、防災教育の現場での活用を目指し、教員研修での利用が始まっている。さらに、地域の防災活動におけるツールとしても継続的な活用が可能である。



概念図

4. おわりに

本事業を通じて、阪神大水害の記憶は、80年前であるにも関わらず、多くの体験者の方々にはっきりと残っていたことが分かった。それほどまでに、深刻な被害をもたらした大水害であったであることを再認識した。

平成30年7月豪雨では、六甲山系での80年にわたる国・県・市が連携した防災事業の成果もあり、人命に関わる被害はなかった。今後も地域と各機関が連携し、緑豊かな六甲山系を護っていきたい。

阪神大水害デジタルアーカイブは下記で公開中
<http://www.kkr.mlit.go.jp/rokko/S13/index.php>



賛助会員 NPO法人 土砂災害防止広報センター